

ロシア語における数詞句とその格表示について*

後藤雄介

東京外国語大学大学院博士後期課程

gotou.yuusuke.j0@tufs.ac.jp

2020年1月15日

1 はじめに

- ロシア語における数詞+名詞(句)からなる数詞句(Numeral phrases)は、その非常に複雑な形態統語的特徴ゆえに、数多くの研究が存在する:
e.g., Corbett (1978a,b), Pesetsky (1982), Babby (1987), Franks (1995), Bailyn (2004), Pereltsvaig (2006), Pesetsky (2013)
- しかし、未解決の問題も多く、例えば、数詞句内部の要素の格表示と格付与の問題がある。

(1a.) pjat' stolov
five-nom/acc desks-genq
「5つの机」

(1b.) s pjat'ju stolami
with five-ins desks-ins
「5つの机と」

- (1a.) 数詞と名詞の格が異なる。
⇒句全体が、構造格(主格/対格)が付与される環境で生起。数詞は名詞へ数量属格(genitive of quantification; Babby 1987)を付与。
- (1b.) 数詞と名詞の両方が同じ格になる。
⇒句全体が、語彙格(ロシア語では、属格、与格、具格、所格)が付与される環境で生起。
- Babby (1987): 前者を heterogeneous なパターン、後者を homogeneous なパターンと呼称。

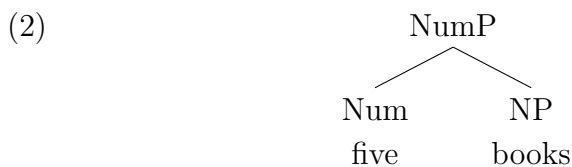
*本研究は JSPS 科研費 (JP18K00526、研究代表者: 匹田剛) の助成を受けている。

- この2つの格表示のパターンを適切に導くにはどのような句構造を想定すべきか、そしてどのような格付与のメカニズムが必要かという点で、現在に至るまで議論が続いている。
- 本発表の目的: 極小主義プログラムの枠組み (Chomsky 1993, 1995, 2000, 2001) を採用した上で、格素性の値の上書きを排除した分析を提案。
- その分析を採用した上で、適切な格表示のパターンを導くためには、顕在的な冠詞を持たないロシア語においても、DP (Determiner phrase; Abney 1987) の投射が必要であることを論じる。

⇒冠詞の有無によらずどの言語においても DP が存在すると考える、普遍的 DP 仮説 (Universal DP hypothesis; e.g., Pereltsvaig 2007) を支持。このことは統語構造の通言語的な普遍性を示唆。

2 議論の前提と出発点

- 数詞句の構造について、数詞が主要部であり、補部として名詞句を取る構造と考える。



- Babby (1987): 上記の heterogeneous なパターンと homogeneous なパターンを導くために、以下の2つを主張。

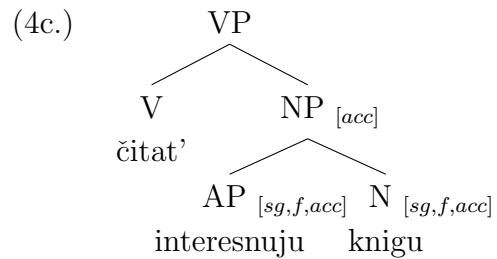
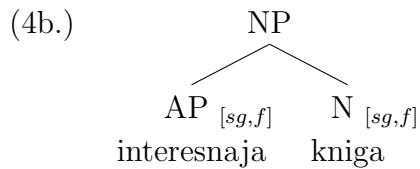
- (i) 格は句の最大投射 (XP, YP など、句のレベル) に付与され、その後付与された格素性の値が句の内部に浸透 (percolate)。

⇒名詞を修飾する形容詞等は、名詞と格に関して一致するのではなく、名詞句の最大投射から浸透によって格素性の値を受け取る。

- (3) (⋯) while the head noun does in fact control the number and gender agreement of its modifiers, it does *not* control their case marking.

「主要部名詞は、実際、修飾語の数と性の一致をコントロールするが、その格表示はコントロールしない」 (Babby 1987: 91)

- (4a.) čitat' interesnuju knigu
 read interesting-acc.sg.f book-acc.sg.f
 「面白い本を読む」



- (4b.) N *kniga* の [sg, f] のみが AP *interesnaja* へコピー
- (4c.) V は NP へ [acc] を付与し、その後 [acc] はそれぞれ AP と N へ浸透

(ii) 以下の格の優先順位に関する階層を提案。

(5) 語彙格 > 数量属格 > 主格/対格 (Babby 1987: 116)

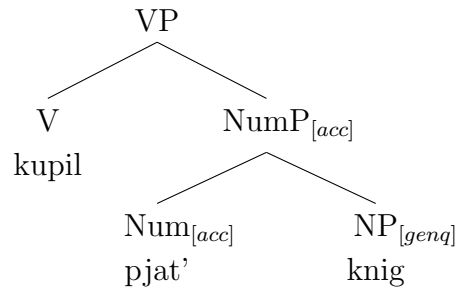
⇒ 数量属格の付与は主格/対格 (構造格) より優先され、語彙格は数量属格より優先される。

(6a.) On kupil pjat' { *knigi / knig }.
 he bought five-acc books-acc / books-genq
 「彼は5冊本を買った」

(6b.) On vladeet pjat'ju { jazykami / *jazykov }.
 he master five-ins languages-ins / languages-genq
 「彼は5つの言葉をマスターしている」

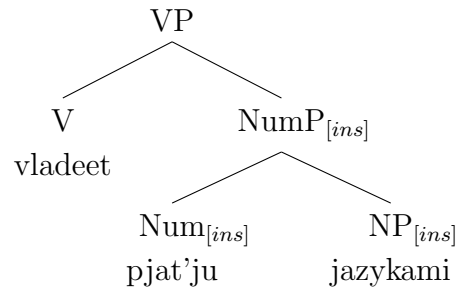
- (6a.) 動詞 *kupil* 「買った」は対格を付与。Num *pjat'* 「5」は対格だが、NP *knig* 「本」は数量属格。NP を対格にすると非文。
- (6b.) 動詞 *vladeet* 「マスターしている」は具格を付与。Num と NP *jazykami* 「言葉」の両方が具格。NP を数量属格にすると非文。

(7)



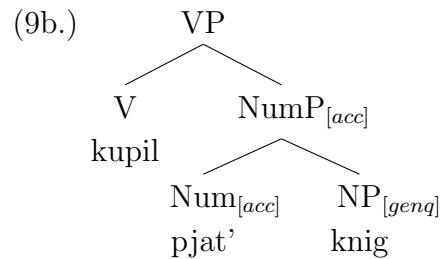
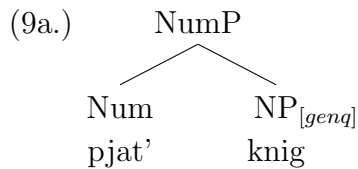
- 節点 NP は、Num から数量属格が付与されうる位置であり、V から付与された対格が NumP から浸透しうる位置でもある。
- 格の階層により (数量属格 > 主格/対格)、数量属格が優先される。

(8)

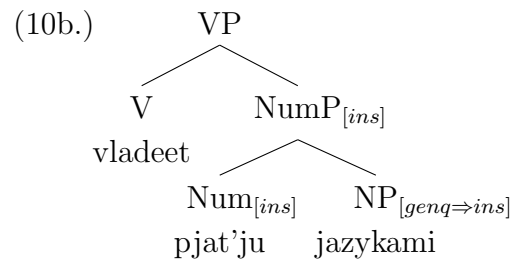
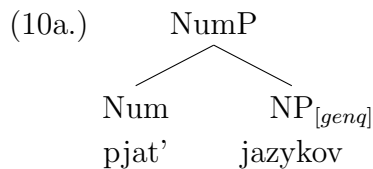


- 節点 NP は、Num から数量属格が付与されうる位置であり、V から付与された具格が NumP から浸透しうる位置でもある。
- 格の階層により (語彙格 > 数量属格)、具格が優先され、Num と NP の格は同じになる。

- Babby の研究は当時の統率・束縛理論 (Government and Binding theory; Chomsky 1981, 1986; 以下、GB 理論) の枠組みで適切に NumP(内部) の格表示を説明。
- Babby の案では NumP 内の NP への格付与は 1 度のみ。
⇒ GB 理論は表示に基づく理論であり、文の構造が一定程度出来上がった状態から各操作が始まる。そのため、(NP から見て) NumP 全体が後に構造格・語彙格のどちらが付与されるかが前もって分かる。
- ロシア語の NumP の格表示のパターンについて、現行の極小主義プログラムの枠組みにおいても、NP への格付与は“1 度のみ”となるだろうか。



- (9a.) Num と NP が併合後、Num から NP へ数量属格が付与される。
 - (9b.) NumP 全体に対格が付与されると、Num には対格が浸透するが、NP は既に格素性の値が決まっているため、NP には対格は浸透しないと考えられる。
- ⇒ heterogeneous なパターンの導出は問題ない。



- (10a.) Num と NP が併合し、NP へ数量属格が付与される。
 - (10b.) NumP 全体に具格が付与されると、Num には具格が問題なく浸透する。一方、NP は既に格素性の値が決まっているものの、適切な格表示を得るには NP にも具格が浸透しなければならない。
- ⇒ NP には 1 度数量属格が付与されるが、格の階層により具格への値の上書きが必要。

- 極小主義プログラムの枠組みでは、語彙格環境の NumP 内部では必然的に格素性の値の上書きを認める必要が出てくる。
- しかし、一度決定した格素性の値が、派生の後の段階で上書きされるという事態は経済的ではなく、理論的に望ましいとは言えない。
- 「語彙格環境の場合、Num は NP へ格付与しない」という規則を設定すれば、上書きを回避出来るか。

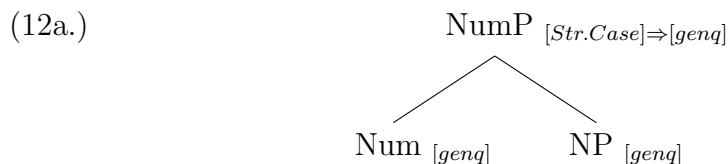
⇒ Num と NP が併合した時点で、Num は派生の後の段階で語彙格が付与されることが分かっているため、先読み (look-ahead) が生じてしまう。

3 提案と分析

- Babby (1987), Norris (2014) にならい、格は句の最大投射へ付与され、その後句の内部の要素へ浸透すると考える。
- Num は NP へ格付与しない。
- NumP へ格が付与された段階で、以下の書き換え規則を設定する。

(11) Str. Case \Rightarrow genq/_+[範疇素性 *num*]

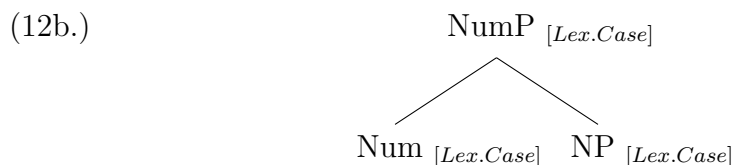
- この規則は、節点 NumP に構造格が付与される場合、節点 NumP の範疇素性 [*num*] により、その格素性の値を数量属格へ書き換えるというもの。そして、NumP から Num と NP の“両方へ”数量属格が浸透すると考える。



→ 従来数詞の主格/対格形として考えられてきた語形は、数量属格形ということになる。したがって、語彙格環境と同様に、構造格環境においても Num と NP の格は同じになる。

⇒ heterogeneous なパターンと homogeneous なパターンの対立は消失する。

- 上記の規則は構造格についてのみ言及しているため、NumP 全体に語彙格が付与される場合は規則が適用されず、そのまま Num と NP へ浸透する。



⇒ 語彙格環境において NP の格素性の値の上書きは生じない。

- 「ある素性の値が別の値になる」という点では上書きも書き換え規則も同じだが、上記の規則では派生の後の段階で NP の値が変わることはなく、NumP に格が付与された時点で NumP 全体と内部の要素の値が決定される。

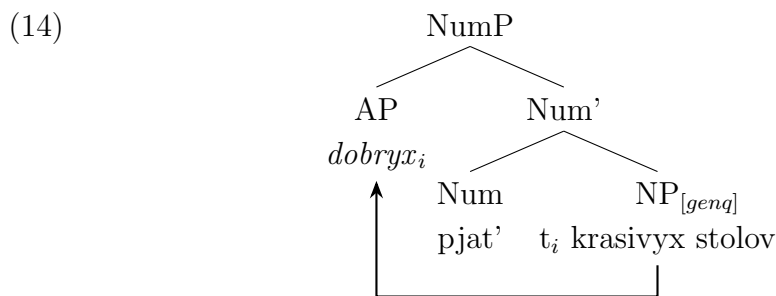
□ この分析を採用する経験的なメリットとして、何があるか。

- *dobryj* 「たっぷり、かなりの」や *polnyj* 「余すところのない、まるまる」、*celyj* 「まるまる、～も」などの一部の形容詞 (以下、*dobryj* タイプの形容詞) は数詞に先行する位置を占め、数量属格になる。

(13a.) *dobryx* *pjat'* *krasivyx* *stolov*
 good-genq five-genq beautiful-genq desks-genq
 「かなりの5つの美しい机」 (Pesetsky 2013: 57)

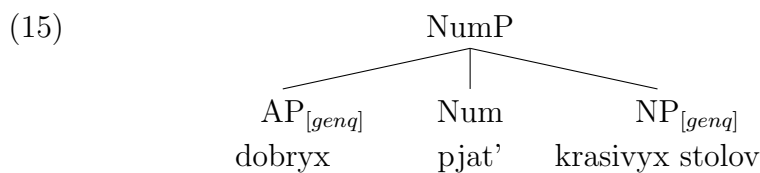
(13b.) *polnyx* *sem'* *let*
 full-genq seven-genq years-genq
 「まる7年」 (Franks 1995: 100)

- (i) 移動によるアプローチ (Corbett 1979, Pesetsky 2013): 当該の形容詞は NP 内で基底生成され、Num から数量属格が付与された後に移動する。



- 移動によるアプローチは、格表示と語順を適切に導いているが、Babby (1987) が指摘しているように、*dobryj* タイプの形容詞がなぜ移動するのか、という理由が判然としない。

- (ii) 三枝分かれのアプローチ (Babby 1987): *dobryj* タイプの形容詞がある場合は、二枝分かれの構造ではなく、三枝分かれの構造をなしている。



- Babby (1987) は Num が c 統御する要素に数量属格が付与されると主張している。上記の構造で Num が c 統御するのは、AP と NP の2つ。

(16) Node A c(onstituent)-commands node B if neither A nor B dominates the other and first branching node which dominates A dominates B.

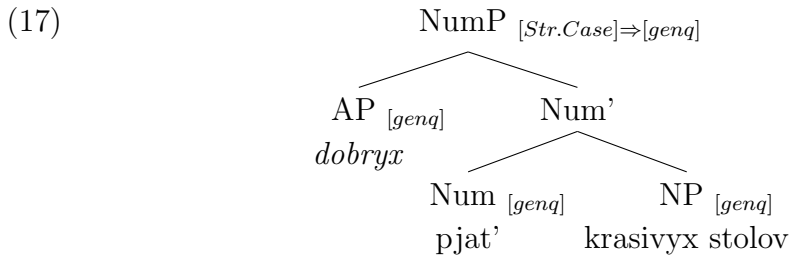
「節点 A も節点 B も他方を支配せず、節点 A を支配する最初の枝分かれ節点が節点 B を支配する場合、節点 A は節点 B を c(構成素) 統御する」

(Reinhart 1976: 32)

- Babby (1987) の提案は、確かに、移動によらずに *dobryj* タイプの形容詞への格付与を説明出来ている。

→ しかし、一般に、句構造は二枝枝分かれであると想定されているため (Chomsky 1995)、三枝枝分かれの構造による説明もまた ad hoc である。

- 本発表では、*dobryj* タイプの形容詞は NumP の指定部で基底生成されると考える。



- NumP に付与された構造格は数量属格へ書き換えられ、数量属格の値が指定部の形容詞 (および Num と NP) へ浸透すると考える。

⇒ *dobryj* タイプの形容詞の移動も三枝枝分かれの構造も不要となる。

□ 一方で、本発表の提案のままでは誤った予測をする事例もある。

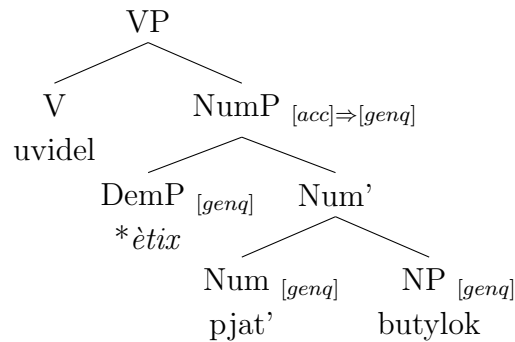
- 指示代名詞や所有代名詞、*poslednij* 「最近の、この前の」、*pervyj* 「最初の」といった形容詞 (以下、*poslednij* タイプの形容詞) は数詞に先行して主格・対格となり、数量属格だと非文になる。

(18a.) Ja vypil {*poslednie* / **poslednix*} pjat' bol'six butylok vina.
 I drank last-acc / last-genq five-genq big-genq bottles-genq wine-gen
 「私は最後の 5 本の大きなワインボトルを飲んだ」 (Babby 1987: 118)

(18b.) Ja uvidel {*èti* / **ètix*} pjat' butylok.
 I saw these-acc / these-genq five-genq bottles-genq
 「私はこれらの 5 本のボトルを見た」 (Babby 1987: 109)

- *dobryj* タイプの形容詞と同様に、指示代名詞や *poslednij* タイプの形容詞等が NumP の指定部に位置すると考えると …

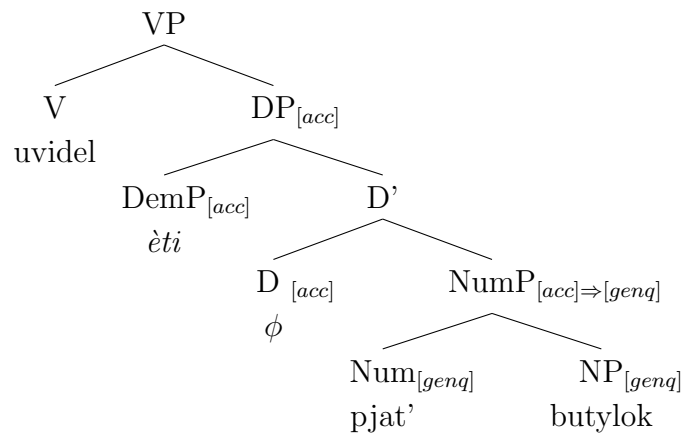
(19)



⇒ NumP から数量属格が指定部に浸透し、非文を適格文だと予測してしまう。

- “顕在的な冠詞を持たない言語が DP の投射を持つか否か” という点については、多くの議論があるが (e.g., Bošković 2005, 2009, Pereltsvaig 2007)、ロシア語においても DP の投射が存在すると想定する。
- Pesetsky (2013) にならい、指示代名詞や *poslednij* タイプの形容詞等は DP の指定部の位置を占め、D の位置は空だと考える。

(20)



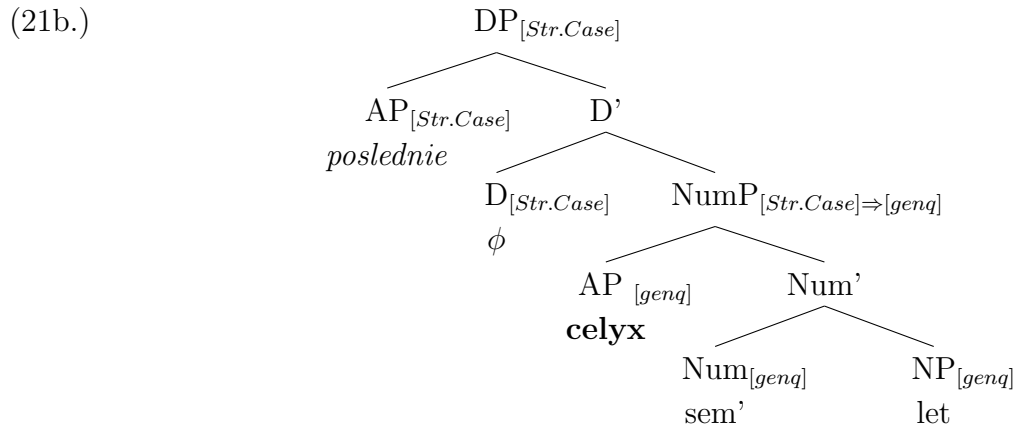
- 構造格から数量属格への書き換え規則は、範疇素性 $[num]$ を持つ NumP のレベルで適用される。

⇒ そのため、その素性を持たない DP のレベルでは書き換えが起こらない。このことから DP 内の要素は構造格がそのまま付与される。

- Pesetsky (2013) は *poslednij* タイプの形容詞と *dobryj* タイプの形容詞が共起する例を挙げている。

(21a.) *poslednie celyx sem' let*
 last-nom/acc whole-genq seven-genq years-genq
 「このまる7年間」

(Pesetsky 2013: 58)



- 本発表の分析では、*poslednij* タイプの形容詞は DP 内にあるため数量属格は付与されず、構造格が付与される。
- NumP の指定部にある *dobryj* タイプの形容詞 (および Num と NP) には、構造格が節点 NumP で数量属格に書き換えられ、それが浸透する。
- *poslednie celyx sem' let* 「このまる7年間」という句の内部に関して、従来の分析と本発表の分析とでは格表示のパターンが大きく異なる。

(22a.) 従来の分析 (Num が NP へ数量属格を付与):

[*poslednie*_{nom/acc} **celyx**_{genq} *sem'*_{nom/acc} **let**_{genq}]
 last whole seven years

(22b.) 本発表の分析 (NumP で構造格を数量属格へ書き換え):

[*poslednie*_{nom/acc} **celyx**_{genq} **sem'**_{genq} **let**_{genq}]
 last whole seven years

- (22a.) 従来の分析では、主格/対格と数量属格が交互に顕われるパターン。
- (22b.) 本発表の分析では、主格/対格が数量属格に変わると、以降は数量属格のままというパターン。

4 1,000 の場合

- 1,000 の場合、1,000 に後続する名詞が、常に属格表示になる場合と、1,000 と同じ格表示になる場合とがある (Corbett 1978a,b, Timberlake 2004, Ionin and Matushansky 2018)。

(23a.) o tysjače rublej
about thousand-loc ruble-gen

(23b.) o tysjače rubljax
about thousand-loc ruble-loc
「1,000 ルーブルについて」

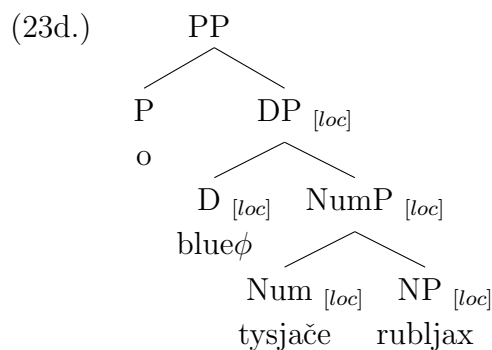
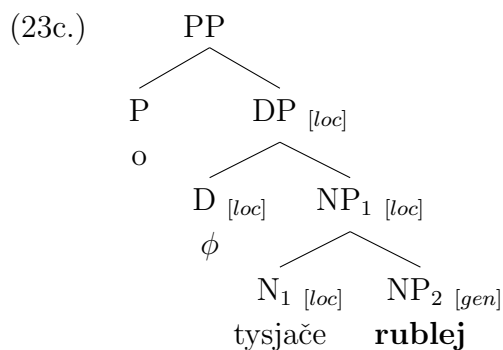
(Corbett 1978b: 357)

- (23a.) 1,000 と名詞の格が異なる。

⇒ 語彙格 (ここでは所格) が付与されているにも関わらず、両者の格が異なる (提案した規則の予測に反する)。

- (23b.) 1,000 と名詞の格が同じになっているため、現状の分析で問題ない。

- Ionin and Matushansky (2018) にならい、1,000 は名詞の場合と数詞の場合とがあると考えるかどうか。



- (23c.) NP₂ は N₁ から属格が付与されており格の値が決定済みのため、DP に付与された所格の値は浸透しない。

- (23d.) NP は NumP 内の要素であるため、DP に格が付与されるまでは、格の値は未決定。そのため、所格が問題なく浸透する。

- しかし …

(24a.) s (...) **tysjač’ju** {studentov / studentami}
with thousand-ins students-gen / students-ins

(24b.) s (...) **tysjačej** {studentov / *studentami}
with thousand-ins students-gen / students-ins

「1,000 人の学生と」

(Ionin and Matushansky 2018: 175)

- 1,000 の具格は *tysjač’ju*/*tysjačej* の 2 つがある。
 - *tysjač’ju* の場合は、後続する名詞は属格でも具格でも適格となる。
 - *tysjačej* の場合は、名詞が属格の場合のみ適格になる。
- 仮に *tysjač’ju* を数詞だと考えると、名詞が具格になることは説明出来るが、属格となることは説明出来ない。
- 一方で、*tysjačej* を名詞だと考えると、後続する名詞が具格にならず属格になることは説明が出来る。
- 1,000 に関しては、数詞と名詞の両方の *ver.* があると考え、いくつかの格表示のパターンは適切に導くことが可能だが、適格なパターンを誤って非文だと予測してしまう場合もある。
- この点について、どのようにして全てのパターンを導出するか検討する必要がある。

5 100 万の場合

- 100 万の場合、後続する名詞の格は、常に属格になる (Corbett 1978a,b, Timberlake 2004, Ionin and Matushansky 2018)。

(25a.) o millione rublej
about million-loc ruble-gen

(25b.) *o millione rubljax
about million-loc ruble-loc

「100 万ルーブルについて」

(Corbett 1978b: 357)

- この点から、100 万は数詞の場合ではなく名詞であると考えられる。

しかし …

- (26) **celyx** million **čelovek**
whole-genq million-? people-?

「100 万人」 (Ionin and Matushansky 2018: 174)

- *dobryj* タイプの形容詞は “NumP” の指定部に位置し、そこで数量属格の値を得ると分析した。
 - 仮に 100 万が数詞の ver. はなく名詞の ver. しかないのだとすると、*dobryj* タイプの形容詞は (事実と反して) 数量属格になるはずがない。
 - (26) では、やはり、数詞の ver. の 100 万が使用されており、NumP があるのでは？
- ⇒ その場合、100 万と名詞は数量属格ということになる。
- 100 万に後続する名詞の格を考慮すれば、名詞 ver. “のみ” が存在すると考えなければならないが、*dobryj* タイプの形容詞の格表示を考慮すると、数詞 ver. も存在すると考えなければならない。
- ⇒ この点について、今後解決策を見つける必要がある。

6 おわりに

- ロシア語における NumP(内部) の格表示と格付与について考察。節点 NumP のレベルで「Str. Case ⇒ genq/_+[範疇素性 *num*]」を設定し、現行の枠組みでは語彙格環境の NumP 内で生じる格素性の値の上書きを排除。
- ⇒ 構造格環境でも語彙格環境においても、NumP 内部の要素の格は常に同じものになる。
- 数詞に先行する指示代名詞や *poslednij* タイプの形容詞等の格表示を導くために、DP の投射を想定。
 - ただし、ロシア語の NumP は多くの未解決の問題を有しており、今後検討する事例を拡大し、提案の妥当性の確認と修正が必要。

参考文献

- Abney, Steven. 1987. The English noun phrase in its sentential aspect. Doctoral Dissertation, MIT.
- Babby, Leonard. 1987. Case, prequantifiers, and discontinuous agreement in Russian. *Natural language & linguistic theory* 5:91–138.

- Bailyn, John. 2004. The case of Q. In *Proceedings of formal approaches to Slavic linguistics: The Ottawa Meeting*, ed. Olga Arnaudova, Wayles Browne, Maria Luisa Rivero, and Danijela Stojanović, 1–35. Ann Arbor: Michigan Slavic Publications.
- Bošković, Željko. 2005. On the locality of left branch extraction and the structure of NP. *Studia linguistica* 59:1–45.
- Bošković, Željko. 2009. More on the no-DP analysis of article-less languages. *Studia linguistica* 63:187–203.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on government and binding: The Pisa lectures*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. Cambridge: MIT press.
- Chomsky, Noam. 1993. A minimalist program for linguistic theory. In *The view from building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, 1–52. Cambridge: MIT press.
- Chomsky, Noam. 1995. *The minimalist program*. Cambridge: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155. Cambridge: MIT press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. Michael Kenstowicz, 1–52. Cambridge: MIT Press.
- Corbett, Greville G. 1978a. Numerous squishes and squishy numerals in Slavonic. *Classification of grammatical categories* 43–73.
- Corbett, Greville G. 1978b. Universals in the syntax of cardinal numerals. *Lingua* 46:355–368.
- Corbett, Greville G. 1979. Adjective movement. *Nottingham linguistic circular* 8:1–10.
- Franks, Steven. 1995. *Parameters of Slavic morphosyntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Ionin, Tanya, and Ora Matushansky. 2018. *Cardinals: The syntax and semantics of cardinal-containing expressions*. Cambridge: MIT Press.
- Norris, Mark. 2014. A theory of nominal concord. Doctoral Dissertation, UC Santa Cruz.
- Pereltsvaig, Asya. 2006. Small nominals. *Natural language & linguistic theory* 24:433.
- Pereltsvaig, Asya. 2007. The universality of DP: A view from Russian. *Studia linguistica* 61:59–94.
- Pesetsky, David. 1982. Paths and categories. Doctoral Dissertation, MIT.
- Pesetsky, David. 2013. *Russian case morphology and the syntactic categories*. Cambridge: MIT Press.
- Reinhart, Tanya. 1976. The syntactic domain of anaphora. Doctoral Dissertation, MIT.
- Timberlake, Alan. 2004. *A reference grammar of Russian*. Cambridge: Cambridge University Press.